

# 教師の腕前診断

今回のテーマ

## 「先生、宿題を出してください！」



### その一 宿題は出した方がいい？

4月、新しいクラスを担任して初めての懇談会。保護者の自己紹介の後に「何かございませんか？」と先生が話を向けました。すると、ある保護者がある時を待っていたかのように挙手します。

「先生、宿題を出していただけませんか。隣のクラスは宿題があるので家で勉強していますが、宿題がないうちの子には私が『勉強は？』と口うるさく言っています。お陰で毎日『勉強する、しない』で親子喧嘩です。」

ウン、ウンと頷く多くの保護者の顔が目に入りました。先生は家庭のことに干渉しない方がいいと思っ宿題を出さないでいました。さて、先生はどうすべきでしょうか？

### Q1 宿題を出すべきですか？

- ① 宿題を出す
- ② 宿題を出さない

先生は、迷っていました。家庭への干渉もそのひとつですが、受験をする子どもの保護者の顔が浮かんだからです。

受験組は塾に通い、塾の宿題で遅くまで勉強をしています。それだけに学校から出る宿題にいい顔をしません。内申書を気にしてそれを口にはせずに宿題をやってくる子がいるでしょうが、するとその子が睡眠不足になります。

また、宿題を出してもやってこない子どもがいます。その子どもへの対応も考えなければなりません。

そんな時に文部科学省の「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を思い出しました。そこでは、日本の生徒の「宿題や自分の勉強をする時間」がOECD（経済協力開発機構）参加国中最低であることを踏まえ、「学びの機会を充実し、学ぶ習慣を身に付ける」という方針が示されています。「放課後の時間などを活用した補充的な学習や朝の読書などを推奨・支援するとともに、適切な宿題や課題など家庭における学習の充実を図ることにより、子どもたちが学ぶ習慣を身に付ける」とあります。

これが、「宿題を出す」根拠となります。文部科学省が宿題の奨励をしているので、教師は自信を持って宿題を出せそうです。

### その二 宿題の内容は？

先生は文部科学省の方針や保護者の希望を汲んで、宿題を出すことにしました。

帰りの会で宿題を板書しました。当然子供たちからはブーイングです。

さて、読者の先生は次のどの宿題を実施しますか？どの宿題を出すかによって、先生の「子どもたちが学ぶ習慣を身に付けることができる家庭学習」の認識度がわかります。

### Q2

どの宿題を出すべきですか？  
次の5つの宿題を適切な順番に並べかえてみましょう。

- ① 漢字ドリル
- ② 計算ドリル
- ③ 音読
- ④ 自由勉強
- ⑤ プリント



「学ぶ習慣を身に付ける」第1位は「①」の漢字ドリルです。

宿題はどうして出すのか。それは「子どもたちが学ぶ習慣を身に付ける」、家庭学習の習慣化のためです。そのためにはひとりて出来る課題が「適切」となります。漢字ドリルなら、手本のなぞり書きをするだけです。漢字ノート1頁、漢字一字につき5回など与えられた範囲の課題をこなせば終わりが来ます。

また、漢字ドリルは練習量と成果が比例します。漢字練習の回数が増えれば増えるほど記憶の定着が図れます。

初期の宿題のキーワードは、「ひとりてできる」なのです。

第2位は「③」の「音読」です。

音読も「ひとりてできる」宿題ですが、第2位としたのはワークテストに反映しないからです。保護者が我が子の学力がついたと判断する要素のひとつがワークテストです。音読は「上手に読めるようになった」という成果はわかりませんが、読解に役立ってテストの点数が上がったというような向上の様子が目に見えません。それで第2位としました。

さて、音読の宿題ですが、私は次の2つの条件を出しています。

- ① お家の人に聞いてもらう。
- ② 社会や理科の教科書も読む。

宿題は誰の為に出すのでしょうか。子どもの学力向上は当然ですが、保護者の「安心」のためでもあります。保護者は子どもが勉強をしていると安心します。夕食の準備をしているそばで我が子が音読をすれば、「勉強して

る」と確認できます。

さらに、翌日も同じ範囲を出せば「あれ、昨日よりも上手な読みをしている」と気付き、我が子をほめることができます。ほめられた子どもは満足し、「よし、明日もお母さんを喜ばせよう」と意を強くします。音読の宿題は、良好な親子関係を築くだけでなく、子どもの宿題意欲の向上にもなります。

音読といえば国語が一般的ですが、社会や理科の教科書の音読をあえて出します。授業中に読む機会が少ないという事もあります。他にも次のような特徴があります。

- ・漢字の使用率が高い。
- ・専門用語が多い。
- ・社会的な事象が多い。

子どもにも馴染みのない内容が社会や理科なのです。社会事象だけに親の関心もあり、そこから親子の話題が盛り上がりやすくなります。

「学ぶ習慣を身に付ける」第3位は「④」の自由勉強です。

ただし、ひとりてできない子どもがいますから、いきなり「自由」と子どもの意思に任せるのは危険です。そこで、当初は自由勉強のメニューを示します。

漢字を一字につき10回、音読を2回した後、気に入った表現を書く、など主に反復練習系の課題です。

こういう反復練習系の宿題をきちんとできるようにしたら、新聞を読んだ感想、日記、調べ学習など創意工夫を必要とする課題など教師がメニューを与え、その中から課題を選択できるように配慮します。

そして、最終的にはどんな内容にするかを子どもの「自由」に任せます。

第4位は「②」の計算ドリルです。

計算ドリルでは、「わからない、できない」という子どもが出てしまいます。わからないのは達成感もなく、途中で投げ出してしまい、保護者の指導を頼ることもありません。

計算がわからなければ親に教えてもらおうとします。小学生レベルの問題とはいえ、「最近の小学生の問題は難しいのよね」という声をよく耳にします。これは「私には教えられない」といつているわけです。親にもプライドがあります。「教えられない」ということを我が子に知られたくはありません。また、保護者が教えるということはその時間を割くということになります。保護者の夕方は忙しいので、子どもの勉強に関わる時間はありません。

音読の場合は保護者が疑問に思い、自分から進んで子どもと関わろうとしますが、計算ドリルの場合はどちらかというと子どもにせがまれてという消極的な関わりです。

さらに、「親に教えて」という子は理解度が遅い子供です。すると、親は「なんでこんな問題ができないの」と我が子を非難するので、子どもは劣等感を持ちます。

「学ぶ習慣を身に付ける」第5位は「⑤」のプリントです。

答えがわからないからです。相談された保護者も答えがなければ半信半疑です。どうしてもプリントを出す場合は解答も一緒に渡すといいでしょ。